「ユーラシア」概念の再考 —「ヨーロッパ」と「アジア」の間—

浜 由 樹 子

(津田塾大学国際関係研究所研究員)

Eurasianism Re-examined: Russia between 'Europe' and 'Asia.'

HAMA, Yukiko

Research Fellow, Institute of International and Cultural Studies, Tsuda College

Abstract

During the interwar period, several thinkers and politicians intellectually challenged the so-called "Western state system"—an international order comprising nation-states. Some of the ideas, such as Coudenhove-Kalergi's "Pan-Europe" or Aristide Briand's "the United States of Europe" bore fruit later on in the form of regional integration. Other ideas failed or simply vanished into oblivion.

In this paper, I examined and reevaluated Russia's Eurasianism as one of those challenging ideas that advocated the significance of a "region" to overcome the antagonism derived from the nation-state system.

Eurasianism, which emerged among Russian émigrés in the 1920s, is usually regarded as a variation of Slavophiles in Russian intellectual history. However, on the basis of Eurasianists' various descriptions of contemporary international relations, one can elicit their critical view toward the nation-state system. As is often said, the concept of a nation-state which originated in Western Europe presumed national homogeneity within a particular territory. However, many other parts of the world such as Russia are actually multinational regions. According to Eurasianism, Europeanization (nation-building modeled on Europe) leads to the destruction of the inherent diversity in the region. Therefore, they attached considerable importance to Russia's national and cultural diversity. Moreover, this is the reason why they named Russia as "Eurasia": Russia's vast region had served as a place of exchange between Europe and Asia through its history. They believed that, as a result, it fostered a multicultural character. In their viewpoint, "Europe" meant homogeneity and "Eurasia" meant diversity in contrast.

With this notion as a background and focusing on the ideas during the interwar period, it can be stated that there are many similarities between Eurasianism, Pan-Europeanism, and even Asianism in Japan. Regardless of the differences in the context, they all emerged as a criticism to the concept of a nation-state and to modern inter-

Keywords: Eurasianism, Pan-Europeanism, Asianism, the interwar period

national relations. Of course, Eurasianism was different from Pan-Europeanism in some respects. For example, mentioning a map (an appendix of the book *Pan-Europe*), one Eurasianist criticized that Coudenhove-Kalergi's "Pan-Europe" was an expression of colonialism, because his "Pan-Europe" included colonies in Asia and Africa. Another Eurasianist pointed out the practical difficulties in European integration. In short, Pan-Europeanism reflected the interest of victorious European states after World War I.

With regard to the criticism of the modern nation-state, the Soviet Union also appeared as a challenger. Eurasianism held a positive opinion on the federalism which could be a suitable governing system for the multinational region. However, on the other hand, they found internationalism and the rule by the Communist Party to be equally dubious.

During the 1990s, immediately after the end of the Cold War and the collapse of the Soviet Union, we witnessed Eurasianism being revived in Russia. It was certainly the consequence of an "identity crisis"; however, at the same time, a reexamination of the regional concepts was a simultaneous phenomenon worldwide. "Eurasia" as well as "Europe" and "Asia" were reconsidered under the new circumstances that arose in the transitional period.

は じ め に

ソ連邦崩壊以来ロシアは、世界の中で占めるその空間的位相と存在意義を模索してきたように思われる。地域を思想上の課題とするということは、世界における自己の個性や存在理由、存在意義を見出そうという思索であるといえる。それは、ソ連邦という国家の消滅を経験したロシアの課題であると同時に、冷戦終焉に伴い、「東西対立」という明瞭な対立図式が消失した後の世界における、地域概念の問い直しという動向の中で論じられるべき問題でもある。

近年、拡大を続ける EU (ヨーロッパ) と、地域協力を進めるアジアとの間で、ロシアにとってのこの問題は一層の深化が求められているように思われる。周知の通り、EU の形成と拡大は、加盟国・新規加盟国の間に「ヨーロッパとは何か」という議論を巻き起こしてきた。そして、その拡大がかつてのソ連邦構成主体であった国々に及び、EU と境界線を接することとなったロシアに対しても、「ヨーロッパ」概念の再考を促してきた。「ヨーロッパ」を問うということはすなわち、ヨーロッパとの関係の中で自己認識を形成してきたロシアにとって、自らがそこに含まれるかどうか、という古典的命題を再び突きつけられることでもある。他方、APEC や ASEAN といったアジアの地域枠組みに積極的に参画しようとしてきたことは、ロシアにアジアの一角を占める「ユーラシア」国家を名乗らせている。ロシアは「ヨーロッパ」なのか、「アジア」ないし「ユーラシア」なのか。ある意味で、ロシア思想史を貫いてきたともいえるこの古くて新しい課題が、国家の消滅を経験した後のロシアに、冷戦の終結と共に加速する地域統合の過程の中で再び検討を迫っているのである。

本論文では、ロシアを、ヨーロッパそのものでもなく、アジアでもなく、ヨーロッパとアジアを架橋する「ユーラシア」と定義したユーラシア主義の思想を通じて、過渡期における国際関係と地域概念の関係を考察する手がかりとしたい。

1 ユーラシア主義とその歴史的意義

(1) ユーラシア主義の思想

ユーラシア主義の思想は、1920年代、ロシア革命によってヨーロッパへの亡命を余儀なくされたロシア知識人の中から生まれた。ユーラシア主義を担ったのは、音韻論の始祖としても構造主義の先駆としても著名な言語学者 N. S. トルベツコイ、地理学者であり地政学者の P. N. サヴィツキー、宗教学者 G. V. フロロフスキーと L. P. カルサーヴィン、後にアメリカにおけるロシア研究を担った歴史学者 G. V. ヴェルナツキー等を中心とした、錚々たる知識人たちであった。彼らが試みたのは、第一に、ヨーロッパこそが「普遍の人類文明」であるという発想を脱却すること、第二に、そのヨーロッパ中心主義から離れて「ユーラシア」たるロシアの特質を明らかにすることであった。それは、地理学、地政学、文明論、民族誌学、言語学、歴史学、宗教学など、様々な側面から「ユーラシア」を定義し、ロシアに相応しい社会のあり方から政治経済体制までもを探ろうとした知的営為であった⁽¹⁾。

例えば、「ユーラシア」の地理的範囲は、概ね 1914 年段階のロシア帝国領とほぼ一致するものとみなされ、地勢・地形（土壌、植生、気候、農業形態などを含む）の観点から、その一体性を証明することが試みられた。ここには、当時の自然地理学において優勢であった説、つまり、ウラル山脈やエニセイ川を境にロシアを「ヨーロッパ・ロシア」「アジア・ロシア」に分ける見解に対する批判が含まれていた。言語や文化を研究対象とした者は、語彙や伝統芸能様式の分析を通じて、ロシアのそれが、ヨーロッパよりもむしろアジアに近い要素を持つと結論付けた。民族学的には、ロシアの地にはスラヴ語系、「ウゴル・フィン語」系、チュルク語系の諸民族が共存しており、歴史上一つの文化的総体を形成してきた点を強調する。凄まじいまでの多言語・多文化状態を保ちながらも、多民族が共生し調和を見せる地域を原風景に、地域ごとに民族集団がそれぞれの文化的特徴を残しつつ、グラデーションを成す様相が「ユーラシア」に見出された。さらに、民族的多様性の議論は歴史解釈にも波及した。「タタールのくびき」と呼ばれるおよそ 240 年間のモンゴルによる支配は、従来のロシア史研究において、「野

⁽¹⁾ ユーラシア主義に関する先行研究は数多いが、例えば、Ishboldin, Boris, "The Eurasian Movement," *The Russian Review*, Vol. 5, No. 2, 1946; Riazanovsky, Nicholas, "The Emergence of Eurasianism," *California Slavic Studies*, No. 5, 1967; Bassin, Mark, "Russia between Europe and Asia: The Ideological Construction of Geographical Space," *Slavic Review*, Vol. 50, No. 1, 1991 (spring); Shlapentokh, Dmitry V., "Eurasianism: Past and Present," *Communist and Post-Communist Studies*, Vol. 30, No. 2, 1997; Shlapentokh, Dmitry V., ed., *Russia between East and West: Scholarly Debates on Eurasianism*, Leiden: Brill, 2007; Laruelle, Marlene, *Russian Eurasianism: An Ideology of Empire*, Washington D.C.: Woodrow Wilson Center Press, 2008; Исаев, И., «Евразийство: Миф или традиция?» *Коммунист*, 1991, №12; Игнатов, А., «Евразийство и поиск новой русской культурной идентичности» *Вопросы философии*, 1995, №6; 廣岡正久『『ユーラシア主義』とロシア国家像の転換—スラブ国家からユーラシア国家へ—』『ロシアナショナリズムと政治文化—「双頭の鷲」とアイコン』創文社, 2000年; 拙稿「N. S. トルベツコイのユーラシア主義—『国民国家』批判の視点に注目して」『スラヴ研究』第51号, 2004年; 拙稿「P. N. サヴィツキーのユーラシア主義」『ロシア思想史研究』第4号, 2007年; 拙稿「ユーラシア主義の起源」(津田塾大学大学院国際関係学研究所, 博士論文, 現在審査中); 渡辺雅司「森と草原の思想—ユーラシア主義再考」『総合文化研究』(東京外国語大学)第11号, 2008年など。ユーラシア主義をめぐる研究史(2006年まで)については、拙稿「ユーラシア主義をめぐる史料・文献の検討」『総合研究』(津田塾大学国際関係研究所)第4号, 2006年。

蛮なアジアの支配」によって、ヨーロッパの発展からロシアが取り残される原因となったという否定的評価を下されてきた。しかし、ユーラシア主義の解釈によれば、モンゴルの支配こそがその後のロシアの国家形成を可能にしたのであり、ロシア帝国はモンゴル帝国の後継者とみなされる。広大なステップを不毛の地ではなく、豊かな交易・交流の場と捉えれば、「ユーラシア」には、ヨーロッパとアジアからの文化を吸収し、さらにそれを伝播する意義が見出される。ステップによって歴史的に結び付けられてきたロシアは、地政学的にも、大陸国家としての利点を活かして、海洋国家とは異なる経済活動を重視するべきであると、彼らは主張する。そして、その政治経済体制モデルには、近代化以前の農村共同体における教会の役割や、広大な地域における東西の通商路であるステップ及び南北を結ぶ河川を治めたモンゴル帝国を意識した統治体制、混合経済などが構想されていた。確かに、ユーラシア主義者たちは自身の多くがロシア正教徒であり、「ユーラシア」を束ねるにあたって中心的な役割を果たすのは、ロシア民族およびロシア正教であることを隠しはしなかった。しかしながら、民族的多様性を謳うユーラシア主義において、ロシア正教が精神的基盤となることを提唱しては、イスラム教、仏教、シャーマニズム、ユダヤ教など、この地に混在する他宗教との緊張を生むことになる。この課題に取り組んだ宗教学者は、汎在神論的世界観に正教と「異教」との共通性を見出し、「愛による統一と自由一致」を掲げる正教には、共通性を有するあらゆる信仰を内包する潜在力があると論じ、この限界を乗り越えようとした⁽²⁾。

ユーラシア主義が生まれた背景には、ロシア革命後の時期におけるロシア人亡命者の自己認識の揺らぎという内在的契機だけでなく、後述するように、彼らの亡命先であった戦間期ヨーロッパの情勢に対する批判もあった。また、当然ロシア革命をどう考えるかという論点を抜きにして、ユーラシア主義の誕生を論じることはいかなる。しかし、亡命者としての彼らのロシア革命観、ソ連観は、現実の変化を受けて変容した側面もあり、必ずしも単純に括れるものではない。また、亡命者の政治運動としての側面を持っていたことも、ユーラシア主義の政治観の理解を困難にしてきた。

もっとも、その知的インパクトに比してユーラシア主義の運動自体は短命であり、1920年代後半から政治的立場をめぐる分裂を繰り返し、第二次世界大戦へと向かう混乱の中で消滅した。その上、ソ連時代に亡命者の思想は「反革命」「反動」とのレッテルを貼られ、ロシア国内で紹介される機会には恵まれなかったために、同時代には一定の影響を残したものの、ソ連邦崩壊後の1990年代に「再発見」されるまで忘れ去られた思想となっていたのである。

さて、ユーラシア主義が提起した多岐にわたる論点を全て検証することは、紙幅の制約上不可能であるため、ここでは次の点に着目することとする。まず、ユーラシア主義において「ヨーロッパ」「アジア」「ユーラシア」とはそれぞれ何を意味したのか。そして、その「ユーラシア」概念には、どのような問題提起が包含されていたのか。

ユーラシア主義はまず何よりも、ロシアをヨーロッパでもアジアでもない「ユーラシア」であると宣言したテーゼ⁽³⁾で知られる。周知の通り、19世紀以来、ロシアの「アイデンティティ」をめぐる知識人の粋を集めて戦わされてきた議論は、100年近くもの間「西欧か、ス

(2) 宗教の論点に関しては、安岡治子「シンフォニック・リーチノスチーユーラシア主義に見られる全一的理想社会の探求」『ロシア・東欧研究』第34号、2005年。

(3) *Исход к востоку: Предчувствия и свершения. Утверждение евразийцев*, София, 1921, стр. vii. 当該書の発表をもって創始されたとされるユーラシア主義は、ロシアを初めて「ユーラシア」と名づけた思想であり、「ユーラシア」論の系譜を書くとするれば、ここを起源と定めることができるであろう。

ラヴか」という枠組みの中に収まり続けていた。これに比して、ユーラシア主義の設定は「ヨーロッパ／スラヴ」「ヨーロッパ／アジア（非ヨーロッパ）」という属性を越えた大きさと新しさを有しており、この発想の転換はこれまでも多くの研究者の注意を惹いてきた。

ここで重要な点は、第一に、ユーラシア主義者が、この「ユーラシア」概念にヨーロッパとアジアの結節環としての役割を見出したということである。つまり、単に、空間的にヨーロッパとアジアの間に位置するということではなく、そこに両者を「つなぐ」意味を見出したということである。第二に、その結果としてもたらされた民族的・文化的多様性を、「ユーラシア」たるロシアの特性として位置づけたことである。ユーラシア主義者によれば、ロシアには、南からは「ビザンチン文化」、西からは「ヨーロッパ〔ロマンス・ゲルマン語系あるいはカトリック〕文化」が流れ込み、東から南東にかけてはモンゴル・タタールやステップ遊牧民の影響が色濃いこの地域では、スラヴ系諸民族と「トゥラン系〔ウラル・アルタイ語系〕」諸民族とが有機的なつながりを持ち、調和をもって共存している⁽⁴⁾。そして、この多様性は「ユーラシア」の地においては決して均質化されることなく存続しており、ロシアは、ヨーロッパやアメリカでできあがった国家・社会とは異なる様態であると考えられた。

「ユーラシア」に對置させるかたちで、ユーラシア主義が批判対象としたのは、ヨーロッパの「自己中心主義」であった。彼らは、ヨーロッパを人類の普遍的到達点であるかのようにみなす発想を批判し、そして、強制的であれ自発的であれ、植民地主義であれヨーロッパを模した近代化であれ、そのような思想に基づいた人為的ヨーロッパ化は悪であると論じた。なぜなら、ヨーロッパをモデルとした近代化や国家形成は住民の同質化を前提としているため、地域に本来あるべき多様性を破壊し、これを画一化し、さらには、社会・文化におけるエリート層と民衆層を引き裂く結果をもたらすからである⁽⁵⁾。このようなヨーロッパ中心主義的発想に立てば、「アジア」とは、現に19世紀末までのロシア知識人たちがみなしてきたように、「野蛮」や「後進性」を表す概念でしかない。そのため、ロシアの「内なるアジア」、つまり、ロシア領内に生きる非ヨーロッパ系、非スラヴ系の諸民族と彼らの文化は、ロシアにとっては「未開」「後進」であり、近代化（時に「ヨーロッパ化」）されるべき対象だと考えられたのである。しかし、ユーラシア主義の主張した地域における民族的多様性の議論は、ロシアの「アジア的要素」を肯定的に評価するという、「アジア」観の転換をもたらした⁽⁶⁾。換言すれば、ユーラシア主義はロシア思想史上初めて、スラヴとアジアを対等に扱った思想であったともい

⁽⁴⁾ Савицкий, П. Н., «Евразийство» (1925), *Континент Евразия*, Москва, Аграф, 1997, стр.82-83; Трубецкой, Н.С., «Верхи и низы русской культуры» (1921), *Наследие Чингисхана*, Москва, Аграф, 2000, стр. 129.

⁽⁵⁾ Трубецкой, Н.С., «Европа и человечество» (1920), *Наследие Чингисхана*, стр.29-90; Трубецкой, Н.С., «Об истинном и ложном национализме» (1921), *Наследие Чингисхана*, стр.103-117.

⁽⁶⁾ Riazanovsky, Nicholas, "Asia through Russian Eyes," Vucinich, Wayne S., ed., *Russia and Asia: Essays on the Influence of Russia on the Asian Peoples*, Hoover Institute Press, 1972. 概して、ユーラシア主義は思想の系譜上、スラヴ主義の流れを汲むものとして説明される。これに対してリャザノフスキーは、アジア観を軸に据えれば、西欧主義もスラヴ主義もアジアを「野蛮」とみなしていた点で共通するとみなし、ユーラシア主義をこの両者の対極に位置づける。ポーランドの歴史家であるハレツキは、ヨーロッパ観を軸に据え、西欧主義と正反対のものとしてユーラシア主義を対峙させ、スラヴ主義には留保を与えるという整理の仕方をしている。Halecki, Oscar, *The Limits and Divisions of European History*, London: Sheed and Ward, 1950, pp. 88-90. このように考えると、ユーラシア主義の思想系譜上の位置づけに関しては、三つの分類が可能だということになる。すなわち、スラヴ主義の一種としての分類（西欧主義／スラヴ主義—ユーラシア主義）、アジア観を軸にした分類（西欧主義・スラヴ主義／ユーラシア主義）、ヨーロッパ観を軸にした分類（西欧主義／ユーラシア主義）である。

える。このように、ユーラシア主義者が案出した「ユーラシア」イメージとは、内にスラヴやアジアを含み、それらが対等に結び付いたものとして描かれる。そして、この「ユーラシア」は「ヨーロッパ」へのアンチテーゼとして論じられ、前者には多様性、後者には画一性・均質性の意味が付与されていたのである。

(2) ユーラシア主義の国際関係史における意味

ユーラシア主義は、ロシア思想史の文脈においては、スラヴ主義の影響を受けたある特殊な思想であると考えられがちである。けれども、この思想が生まれた歴史的背景を検討し、国際関係史の文脈の中に位置づけてみると、従来の評価とは異なる側面が見えてくる。

ユーラシア主義が提示した「ユーラシア」観とヨーロッパ批判は、部分的には、ユーラシア主義者たちが既に亡命前に獲得していたものであるが⁽⁷⁾、併せて、彼らが亡命した先で逢着した現実に触発され、発達した側面も持っている。その例が、戦間期の中・東欧における国家形成にあたって志向される傾向にあった「一民族（一言語）一国家」イデオロギーへの批判であり、1920年代の国際状況に対する疑問であった⁽⁸⁾。

第一次世界大戦が終結すると、崩壊したハプスブルク帝国と、オスマン帝国、ロシア、ドイツ両帝国の解体の跡地に、極めて複雑な民族構成をもつ地域が現れた。この多民族が混住する地域では、民族の境界と国家の境界を一致させる原則は実情にそぐわない。しかしそれでもヨーロッパ的国民国家を成立させようとする新興独立国家の国境画定は、必然的に多くの領土をめぐる争いと、少数民族問題を招いた。並行して、国民国家形成を目指す多くの新興国の支配層は、固有の「国民文化」に正統性を求め、イデオロギーとしての機能に期待したのである。ユーラシア主義者が揶揄したのは、このような政治状況と、文化を人為的に政治目的に従属させようとする傾向であった。

戦間期とは、一方では、未曾有の犠牲と被害をもたらした第一次世界大戦に対する反省から、対立と分断を生み出す国家の超克が様々に試みられた時代である。ヨーロッパ統合の起源

(7) トルベツコイの文化相対主義的観点は、後年において時に「構造主義的分析」とも評される。Neumann, Iver B., *Russia and the Idea of Europe: A Study in Identity and International Relations*, London: Routledge, 1996, p.113. しかし、彼が構造主義の先駆けと称されるようになるよりもずっと早い段階、亡命前には既にその萌芽は現れている。Трубецкой, Н.С., «Финская песнь Kuljo Neito как переживание языческого обычая» *Этнографическое обозрение*, Т.17, № 65-66, 1906; «К вопросу о Золотой Бабе» *Этнографическое обозрение*, Т.18, №68-69, 1906 などには、ロシア帝国内の少数民族の民族誌学を志し始めたばかりのトルベツコイが既に、彼らにとっては異質と思われる文化に対しても、特定の価値観に囚われない評価を意識していた姿勢が窺われる。また、ヨーロッパ中心主義批判に関しては、Трубецкой, «Европа и человечество» *Наследие Чингисхана*, стр. 33; N. S.Trubetzkoy's *Letters and Notes*, Prepared for publication by Roman Jakobson with the assistance of H. Baran, O. Ronen and M. Taylor, Hague: Mouton, 1975, p. 12 において、1909年から1910年頃から既に形成されていたと述懐している。

(8) 一例として、Трубецкой, Н.С., «К украинской проблеме» (1927), *Наследие Чингисхана*, стр. 427. ここでトルベツコイは新興独立国の文化状況について、『『新しい国家』によって現在接木されている『文化』…そのような文化においては、民俗的生活様式のもっとも深いところにある基礎の否定と、別個の無計画に選んだ、大体において本質的ではない生活様式の諸要素を煽動的に強調したものとを組み合わされている」と述べている。また、別の例としては、Савицкий, П. Н., «Географические и геополитические основы евразийства» (1933), *Континент Евразия*, стр. 301-302. ヨーロッパとアジアの地域的分断性に関してサヴィツキーは「ヨーロッパとアジアの『モザイク細分化』は、小さな、閉ざされた、分離的世界の形成に寄与してきた。(中略)現在の通信技術[の発達]にも拘らず、ヨーロッパ、アジアの諸民族は相変わらず自分の小部屋にこもり、狭い世界で暮らしている」と述べ、ユーラシアの持つ統合性との対比を行っている。

といわれるブリアンの欧州合衆国案や、クーデンホーフ・カレルギーが提唱した汎ヨーロッパ運動がその最たる例である。しかし他方では、上記の中・東欧や、独立を志向する植民地諸地域において、「民族」や「宗教」の名の下に次々と国家形成が進められた時代でもあった。言い換えれば、国民国家とそれをアクターとする国際秩序の限界が認識されながらも、その拡大と深化がより一層推し進められていたということである。

このような国際状況の中で、ユーラシア主義者たちは、ヨーロッパをモデルとした国民国家と、国民国家を単位とする国際秩序のあり方を批判したのである。彼らはここから翻って、多民族地域ロシアに目を向ける。そこで、狭量な「偽のナショナリズム」⁽⁹⁾やショービニズムに対抗することを目的に、多様性を内包する広大な多民族地域「ユーラシア」への帰属意識を提唱したのである⁽¹⁰⁾。この点で、ユーラシア主義は、脅威を排除することよりも、より大きな総体の中にこれを包摂することで、対立を乗り越えようとした思想であるといえよう。そう考えれば、ヨーロッパ統合の起源となる統合構想とユーラシア主義とが同じ戦間期のヨーロッパに生まれたことは、必ずしも偶然ではない。いずれの思想にも、戦間期ヨーロッパにおける国民国家の問い直しという契機が背景にあったといえる。無論、ロシアを中心として、広大な多民族地域を統合しようという主導性が、ともすれば一種の覇権主義に転じる可能性を孕んでいることはいうまでもない。現に、ユーラシア主義に対しては、「ユーラシア」に含まれる側からの反発や警戒が表されていたのであるが⁽¹¹⁾、そこには、「被抑圧民族」としての意識を持つが故に、独立国家を手に入れることと「解放」を結び付けた諸民族の志向と、ユーラシア主義との避け難い対立点が垣間見られる。

ところで、ユーラシア主義のような思想が、なぜロシア知識人から、ヨーロッパが推し進めてきた国際秩序形成への批判を伴って現れたかについて、若干書き加えておきたい。しばしば言及されるように、近代国際関係の中でロシアは、西欧からの脅威と圧力に晒されながら近代化を余儀なくされ国家形成を進めた経緯を持つ。対外的には列強の一角を成しながら、内には「後発国」としての矛盾を抱えてきた。そして20世紀初頭、その矛盾の蓄積の結果起こった革命によって、ロシア帝国は消滅する。その際、まさに国家から疎外され亡命者となった一部の知識人たちは、ロシアの「外」から、国家として、地域として、これを問い直す視点を獲得したのであり、その思想的営為から生まれたユーラシア主義には、西欧起源の国民国家、さらにはその国民国家から成る国際関係（近代国家体系）そのものに対する根本的批判が含まれていたといえる。

概括すると、戦間期国際関係の中では、ユーラシア主義が誕生した背景には二つの文脈の交錯点があった。一つは、戦間期という過渡期における国際関係の変容であり、近代国家体系の根本的な問い直しの試みである。もう一つは、革命後のロシア帝国の消滅という状況である。つまり、革命直後のまだ流動性をもった状況下で、その帝国の跡地にどのような国家や体制が成立するのか、という未知数の部分が様々な議論を喚起していたのである。

こう解釈すると、1920年代と1990年代の時代状況との共通性も見えてくる。かつて1920年代に議論された「ヨーロッパとは何か」「アジアとは何か」という問いが、異なる文脈を持

⁽⁹⁾ Трубецкой, Н.С., «Об истинном и ложном национализме» *Исход к востоку*, стр. 71-85.

⁽¹⁰⁾ Трубецкой, Н.С., «Общевразийский национализм» (1927) *Наследие Чингисхана*, стр. 495-496, 498.

⁽¹¹⁾ こうした観点については、ウクライナの歴史家であり活動家でもある D. ドロシェンコが表明している通りである。Дорошенко, Д.И., «По поводу статьи кн. Н.С. Трубецкого «К украинской проблеме»» *Евразийская хроника*, №10, 1928, стр. 41-50.

ちながらも、冷戦終焉後の1990年代に再び浮上したのも、国際関係の変容と連動してのことである。1920年代における「ユーラシア」としてのロシアの自己認識の登場と、1990年代における復活も、これまでの先行諸研究の多くが指摘してきたようなロシア固有の文脈だけではなく、ロシアを取り巻く国際環境の変化という文脈との交錯点で生じた現象であると理解するべきであろう。

2 戦間期の国際秩序構想とユーラシア主義

(1) 汎ヨーロッパ構想とユーラシア主義

先述のように、戦間期のヨーロッパでは、第一次世界大戦の直接的原因ともなった排他的な民族主義・国家主義への反省もあり、国民国家の超克を目指した理念が登場していた。また、同時代のアジアにおいても、欧米主導の国際秩序に対するアンチテーゼとして様々な秩序構想が生み出されていた。ここでは、「ヨーロッパ」「アジア」の国民国家の克服を論じた構想の流れの中にユーラシア主義を位置づけ、その接点、共通性、相違性を検討してみたい。

しばしば、ヨーロッパ統合の起源と位置づけられるブリアンやクーデンホーフ・カレルギーの理念は、ヨーロッパが戦争の惨害に苦しみ、植民地諸地域の抵抗と労働階級からの挑戦に動揺し、「西欧の没落」が喧伝される時代状況下で提唱された。第一次世界大戦では主戦場となり、革命によってロシアという市場を失ったヨーロッパでは、アメリカの経済的台頭に抵抗するためにも、保護主義の高まりを乗り越えて経済協力を実現しなければならないという主張が力を持ちつつあり、また地域協力という網によって独仏の衝突を防ぐという安全保障上の目的もまた、それらの統合構想を支えていた⁽¹²⁾。ヨーロッパ地域の統合構想の意味は、一つには、国家の枠組みが生み出す対立を乗り越えること、「歴史的禍根である分裂」⁽¹³⁾を克服することであった。このことは、「国家間〔における〕政治的憎悪の経済的および国民的原因」となる国境の「止揚」「打倒」を訴えるクーデンホーフ・カレルギーの汎ヨーロッパ構想において、より明確に表現されている⁽¹⁴⁾。

この点に限っていえば、国民国家がもたらす分断性を、地域としての一体性や統合によって克服しようという問題意識において、汎ヨーロッパとユーラシア主義には一定の共通性を見出すことができる。しかし、その一方で、秩序形成の視点には大きな差異がある。例えば、クーデンホーフ・カレルギーの『汎ヨーロッパ』には、一枚の地図が付されている。それは、世界を「汎ヨーロッパ」、イギリス連邦、「汎アメリカ」、ロシア連邦、日本を中心とする「極東アジア」という5つの地域国家に分けており、アジア・アフリカの植民地諸地域は「汎ヨーロッパ」とイギリス連邦に、ラテンアメリカは「汎アメリカ」に含まれ、中国や朝鮮は日本と一体化されているのである。これは、ロシア（ソ連）への配慮を除けば、明らかに第一次世界大戦の戦勝国の論理に基づく。（図1）

この汎ヨーロッパの地図に言及して、ユーラシア主義者は、ヨーロッパ統合構想の理念を一

⁽¹²⁾ Salter, Arthur, *The United States of Europe and Other Papers*, London: George Allen and Unwin Ltd.; デレック・ヒーター、田中俊郎監訳『統一ヨーロッパへの道』岩波書店、1994年、177-206ページ。

⁽¹³⁾ エドワール・エリオ、鹿島守之助訳『ヨーロッパ合衆国』鹿島研究所、1962年、19ページ。

⁽¹⁴⁾ リヒャルト・クーデンホーフ・カレルギー、鹿島守之助訳『クーデンホーフ・カレルギー全集』第1巻、鹿島研究所出版会、1970年、162-163ページ。

付 録
世界地図

図1 クーデンホーフ・カレルギーによる地図

(出典) リヒャルト・クーデンホーフ・カレルギー，鹿島守之助訳『クーデンホーフ・カレルギー全集』第1巻，鹿島研究所出版会，1970年，190ページ。

定部分評価しつつも，自分たちが求める理念は「植民地帝国主義とは相容れない」⁽¹⁵⁾と批判している。国民国家の超克を標榜しはしても，それは必ずしも植民地主義との決別を意味しない。ユーラシア主義者の目には，このことが汎ヨーロッパの限界として認識されていたといえることができる。

また，ブリアンの演説を受けて1929年にユーラシア主義の機関紙に書かれた記事には，「クーデンホーフ・カレルギーの道楽で根拠薄弱な構想として生まれた汎ヨーロッパの理念」が，政策として採用されつつあることが紹介されている⁽¹⁶⁾。ヨーロッパ統合は，ドイツの賠償金問題の効果的解決と，当時特に関税をめぐる深まっていたヨーロッパ諸国とアメリカの対立への対応策として分析されており，上記とはまた異なる政治的動機の観点から捉えられている。そして，いくつもの障害ゆえに，この構想の実現は困難であろうと論じられる。その障害とされるのは，ヨーロッパ諸国のアメリカへの政治的・経済的依存状態であり，さらに「ゆるぎない文化的・政治的基礎を据えることなく，これほどの利害関係にある国々…をまとめること」の困難さであるとされた。この記事の筆者は，しかし，ヨーロッパ統合が文化的・政治的基礎を得ることは，経済的な統合よりも可能性があるとの旨を述べており，「ヨーロッパ統合が一定の成果を出す可能性は否定できない」とも書いている⁽¹⁷⁾。このことは，記事を書いたユーラシア主義者が，ヨーロッパに一定の文化的・政治的共通性があることを認めつつも，

⁽¹⁵⁾ Трубецкой, Н.С., «Об идее-правительнице идеократического государства» (1935) *Наследие Чингис-хана*, стр. 524.

⁽¹⁶⁾ «Пан Европа» Евразия, №.32, 1929.7.27.

⁽¹⁷⁾ Там же.

経済的動機に支えられて、本来多彩な国々の集まる地域に一体性を創出することの難しさを指摘しているともいえる。

ユーラシア主義の課題の一つは、ロシアの地には、地域としての「一体性」と、その地域に住まう民族や文化の「多様性」という、論理的には一見矛盾しそうな二つの要素が同時に存在することを示すことであった。そして、革命後の状況下でその地域が、「国家[を持つ]民族の対等なメンバーとして」認められるべく独立を志向する諸民族⁽¹⁸⁾や、列強からの干渉によって分断されること⁽¹⁹⁾への危機感が、彼らの動機の一つとなっていたのである。そのユーラシア主義者にとってみれば、ヨーロッパ統合とは、一定の共通性を認めつつも、ヨーロッパの地において多数の国民国家をまとめ、人為的に一体性を創り出す試みと映ったのであろう。しかも、初発の理念においては、世界規模の分断と均質化をもたらしてきた植民地主義的発想を内在させるものと捉えられていた。

ヨーロッパ統合を目指した当事者たちと、ユーラシア主義とのこの視点の差異は、第一次世界大戦後の国際秩序を「形成する側」と「形成される側」との違いと、言い換えることもできるかも知れない。それはまた、汎ヨーロッパの思想・運動の担い手が、フランス外相や、政界に影響力を持つ知識人であったのに対し、ユーラシア主義が権力からはもっとも遠い亡命者の思想であったこととも関係する。このことは、その後の思想・運動の現実との結び付きをも規定した。前者が、第二次世界大戦後の欧州統合運動への道筋をつけたのに対して、後者は戦中の混乱の中で雲散霧消し、亡命者の「反動」的思想として忘却されていったのであった。

戦間期のアジアにおける国際秩序形成とその再編は、当然のことながら、ヨーロッパのそれとは条件も文脈もかなり異なる。それにも拘わらず、「アジアとは何か」という問い、「アジア」の一体性と多様性に関する議論は、近代国際関係への批判と連動して現れてきた。日本のアジア主義に限らず、アジア各地で論じられた各種のアジア論には、近代国家体系を問い直すという契機を持つものも少なくない⁽²⁰⁾。本稿では詳細に立ち入ることはできないので、ここでは次の点を指摘するに留めたい。この時期に盛んであったアジア主義やアジア論には、ヨーロッパで成立したとされる近代国民国家の再検討、アジアの持つ民族的多様性の強調、東西文明の交流の地としてこれを捉え直す議論など、ユーラシア主義との間にいくつもの共通項があった⁽²¹⁾。このことは単なる偶然ではない。それは、近代国際関係の根本的問い直しの中から、「ヨーロッパ」「アジア」そして両者を架橋する「ユーラシア」というそれぞれの地域概念を通じて、地域からの思想的挑戦が行われていたことを意味するのである。もっとも、「アジアの盟主」「アジアの解放者」を自任した日本のアジア主義は、その後日本の対外膨張のイデオロギーと変容することになる⁽²²⁾。このことは、近代国際関係への挑戦が権力によって担わ

⁽¹⁸⁾ Трубецкой, Н.С., «Об истинном и ложном национализме» (1921) *Наследие Чингисхана*, стр. 112-113.

⁽¹⁹⁾ Савицкий, П.Н., «Очерки международных отношений» (1919) *Континент Евразия*, стр. 382-398.

⁽²⁰⁾ 山室信一『思想課題としてのアジア—基軸・連鎖・投企』岩波書店、2001年。

⁽²¹⁾ 日本のアジア主義とユーラシア主義の比較については、拙稿「ロシアにおけるユーラシア主義—『アジア』概念との関係を中心に」日本国際政治学会「アジア主義の比較—歴史的な文脈と現実の意味」部会報告ペーパー、2008年10月。

⁽²²⁾ もっとも、日本外交がアジア主義を正式な政策になったことはないという指摘は、政府の側から再三行われてきたが、だからといって、日本がアジア主義的政策を採らなかったということにはならない。この点については、山室信一「日本外交とアジア主義の交錯」『年報政治学—日本外交におけるアジア主義』日本政治学会、1998年。

れた場合、必ずしも、空間的広がりにおいて現状肯定的で、平和構築や経済協力という現実的要請に応じた統合に帰結するとは限らないことを意味する。「ユーラシア」概念が今日、ロシアの権力の側から提唱されることに対して呼び起こされる猜疑心や警戒心は、確かに故なきことではないのであろう。

(2) ソ連邦の理念とユーラシア主義

近代国際関係や国民国家に対する批判という意味では、ソ連邦もまた、一挑戦者として戦前期に立ち現れたということができる。ロシア革命によって亡命を余儀なくされたユーラシア主義者にとって、これをどう評価するかは、いうまでもなく極めて複雑な問題であった。政治体制、イデオロギー、対アジア外交など、彼らが考察対象とした論点は多岐にわたるが、ここでは本稿の問題設定と深く関わる連邦制の理念と民族政策、インターナショナリズムに関する言及を追うことにする。それを通じて、汎ヨーロッパやアジア主義とは異なる方法で国民国家を乗り越えようとしたソ連邦の理念と、ユーラシア主義との接点・対立点を浮かび上がらせることができるであろう。

ユーラシア主義者は概して、多民族地域であるロシアの政治制度として、連邦制を肯定的に評価していた。ソ連の連邦制は、その実態は別としても、「建て前」の上ではソ連邦内の諸民族が平等な権利を享受するという理念を制度化したものであり、例えば1924年のソ連憲法は、形式的には連邦を構成する共和国に「主権」を与え、民族集団の平等を認めることを保障していた。こうした制度の導入を、ユーラシア主義者の一人トルベツコイは次のように評する。

「[ソヴィエト政府の] 国内政策で [重要な点として]、ロシア化の放棄を指摘しよう。…ロシア・ユーラシアを構成する諸民族への公的な権利の付与を認め、もっとも広範な自治を各々に与えることは、ロシア人のみならずトゥラン人も創設に加わった、ロシアの国家体制の歴史的な本質に対する正しい見解に合致するものである。」⁽²³⁾

「革命前のロシアは、ロシア民族が全領土の正式な主であるとみなされる国であった。…しかし、革命時にこの状況は変わった。…もはやロシア民族は唯一の主ではなくなり、領土内に住む平等な諸民族の一つになったのである。…ソ連邦の非ロシア人に現在与えられている権利は剥奪されるべきではない。それを奪おうだとか、制限しようと試みたりすれば、激しい抵抗にあうであろう。」⁽²⁴⁾

スラヴとトゥランが構成する多民族国家を導くべき理念は、「ヨーロッパの模倣」ではもちろんなく、特定の民族に特化した汎スラヴ主義や汎イスラム主義でもなく⁽²⁵⁾、「ユーラシア」としての自己認識に基づいた理念であるべきであり、そして政治制度としての連邦制は、多民族国家に対する「正しい」認識を反映したものとして、肯定的に評価されたのである。

同様の評価を下していたもう一人のユーラシア主義者サヴィツキーは、多民族・多言語状態にあるこの地域に相応しい政治体制として、「全ユーラシアの政治的統一の領域内では、そ

⁽²³⁾ Трубецкой, Н.С., «Наследие Чингисхана: Взгляд на русскую историю не с запада а с востока» (1925) *Наследие Чингисхана*, стр. 276-277.

⁽²⁴⁾ Трубецкой, «Общевразийский национализм» *Наследие Чингисхана*, стр. 493-494.

⁽²⁵⁾ 汎イイズムに関しては、次のような批判的叙述が見受けられる。「一部民族のナショナリズムの遠心力を強める汎イイズムは、ある民族と他の民族との、単一の基準による一面的つながりを強調する。これでは、いかなる現実の生きた多民族文化 (личность) も創れない。」Трубецкой, «Наследие Чингисхана» *Наследие Чингисхана*, стр.503.

それぞれのユーラシアの民族（народ）に、独立した国家〔政治〕活動が保障されるべきである」⁽²⁶⁾とする。このような観点は、論理的には、ソ連邦が採る連邦制への肯定的評価につながる。ただし、そこで行われていた文化政策に関してサヴィツキーが示した見解は、ある批判を含んでいた。

「ユーラシアの多様な諸言語の使用の自由と発展を与えている点において、共産主義政権は、疑いなく、健全で創造的なユーラシアの伝統と隣り合わせている。」しかし、「共産主義政権が宣言している『民族自決』は、かなりの部分虚構である。この『自決』は、純粹文化的な分野でさえ、民族言語において共産主義イデオロギーを取り入れる可能性に帰着する。共産主義者の教義によれば、それぞれの民族文化は、『形式においては民族的、内容は共産主義的』であるべきなのである。」⁽²⁷⁾

つまり、民族語の使用を認めはするが文化創造の内容には干渉する、という政治的対処を見破っているということであり、コレニザーツィヤの欺瞞性についてサヴィツキーが同時代のこの時点で気付いていたということは、慧眼といって構わないであろう⁽²⁸⁾。さらに補足すれば、建前の上では連邦構成主体の平等を謳いながらも、実際は共産党によって束ねられ、それぞれの民族の自主性がフィクションと化していたソ連邦の実態を、彼が感知していたということでもある。共産主義イデオロギーに一貫して批判的であったユーラシア主義において、連邦制の理念と共産主義とは分けて考えられていたともいえる。

さて、国内においては連邦制というかたちで民族対立を乗り越えようとしたソ連邦は、対外的には「民族自決」を掲げ、植民地諸地域やヨーロッパ内の分離主義的運動に対するアピールをもって、資本主義世界からの脅威に対抗することを試みていた。階級対立の克服が民族問題の解決をもたらすという論理に依拠し、革命の輸出を企図するソ連のインターナショナリズムに対し、ユーラシア主義者は懐疑的であった。例えば、先のトルベツコイは次のように述べる。

「社会主義者は、他のどのヨーロッパ人よりも、インターナショナリズムと戦闘的コスモポリタニズムに導かれている…もしもヨーロッパで社会主義体制が確立されたとしたら、ヨーロッパの社会主義国家は、何よりも武力をもって、その同じ体制を全世界に打ち立てることになるであろうし、その後は、誰もこの体制に背かないように厳しく見張ることになるだろう。」⁽²⁹⁾

ここでトルベツコイが議論を「ヨーロッパ」に限定している理由は、彼が社会主義をヨーロッパの土壌から生まれた思想であると考えているからであり、そこに「自己中心主義」的発想が潜在している限り、社会主義化は「ヨーロッパ化」と本質的に同じ末路を辿るということ进行を言いたいからである。このテキスト自体はヨーロッパ批判に終始しているのだが、論理的には、社会主義の「祖」を自任するソ連が、「自己中心主義」に基づいて各地に自らをモデルとした体制を押し付けることを予見したもの、と読み替えることもできる。

⁽²⁶⁾ Савицкий, П.Н., «Евразийство как исторический замысел» (1933) *Континент Евразия*, стр. 110.

⁽²⁷⁾ Савицкий. «Евразийство как исторический замысел» *Континент Евразия*, стр. 109-110.

⁽²⁸⁾ はば同時代に見られたソ連邦に対する欧米の研究者の楽観的見解と比較してみれば、この点はより際立って見える。ソ連の連邦制を、東欧に見られるような民族問題の有効な解決策として期待して取り上げた例として、Janowsky, Oscar, *Nationalities and National Minorities with Special Reference to East-Central Europe*, New York: Macmillan, 1945.

⁽²⁹⁾ Трубецкой, «Европа и человечество» *Наследие Чингисхана*, стр.83.

このようにユーラシア主義のソ連観は、この箇所だけを取り上げても、往々にして行われてきたように、ソ連への「敵対的態度 (Anti)」「友好的態度 (Pro)」,あるいは前者から後者への移行といった単純なカテゴリーで括られるものではない。ただ一ついえることは、形式ばかりの民族政策や、単一の雛形を輸出するようなインターナショナリズムではなく、あくまで地域の特性と条件に立脚した体制のあり方が、ユーラシア主義においては模索されていたということである。彼らが「ユーラシア」の個性を様々な方途で探求し、強調した理由には、国際秩序構想としてのインターナショナリズムへの抵抗があったともいえる。

3 現代「ユーラシア」論への継承と断絶

グラスノスチを直接の契機とする史料公開と言論統制の緩和が進んだ 1980 年代末頃から、とりわけソ連邦崩壊を経た 1990 年代に、ロシアの学界ではユーラシア主義への注目が高まり、読み直しが盛んに行われた。その当時は、もっぱら「アイデンティティの危機」という文脈でこの動向が捉えられていたため、ロシアをめぐる情勢が落ち着きを取り戻すのと同時に、ユーラシア主義への関心も低下していったように見受けられる。そしてその過程では、ユーラシア主義の復権と各種ユーラシア論の登場を、ロシア国内の問題としてだけではなく、国際関係の変容の文脈に位置づけて論じようという視点は欠落したままであった。

一種のユーラシア主義ブームが終息した後、ロシアを「ユーラシア」と表す地域概念は、様々なレベルで人口に膾炙するようになった。これら「ユーラシア」論と 1920 年代のユーラシア主義の思想との間に、そもそも連関性はあるのだろうか。

ロシアの地域研究の代表的な教科書は、ロシア（ないしは旧ソ連地域）を「ユーラシア」と称する発想には、1920 年代のユーラシア主義とのつながりがあることを指摘する⁽³⁰⁾。また、世界におけるロシアの存在意義を思索してきた国際関係研究者（メジドゥナロードニク）の議論には、ロシアを「ユーラシアの国家」と称する論考が多数見受けられるが、その中には、実際に 1990 年代にユーラシア主義への関心を示していた者もいる⁽³¹⁾。ここから判断する限りでは、1990 年代のユーラシア主義の流行は、後のユーラシア論にも一定の影響を及ぼしていると考えられる。

無論、1920 年代のユーラシア主義と、今日散見される数々のユーラシア論とは、その文脈も問題意識も、論じる者の立場も異なり、本来別個の問題として扱われるべきものではある⁽³²⁾。しかしながら、それでもなお答えなくてはならない問いが残る。なぜ 1990 年代に「再発見」されたのがユーラシア主義だったのか。ロシアをめぐる新しい状況に対応するために新

⁽³⁰⁾ Гладкий, Ю.И. и А. И. Чистобаев, *Регионоведение*, Москва, Гардарики, 2003, стр.187.

⁽³¹⁾ 例えば、Титаренко, М., «Россия, Китай, Индия в глобальном мире» *Международная жизнь*, №6, 2002 や, Титаренко, М. и В. Михеев, «Стратегия соразвития России и АТР» *Международная жизнь*, №4, 2001 でロシアを「ユーラシア国家」と称する科学アカデミー極東研究所のチタレンコは、先立って別稿 Titarenko, M.L., "Eurasianism: A Paradigm of Russia," *Journal of Behavioral and Social Sciences*, No.3, 1994 でユーラシア主義について論じ、その関心の高さを示していた。この他に、後にクルグズスタンの外務大臣を務めることになるオトゥンバエワも、早くからユーラシア主義の思想に言及していた一人である。Отунбаева, Р., «В преддверии нового миропорядка» *Международная жизнь*, №3, 1991.

⁽³²⁾ しかしながら、ユーラシア主義のイデオロギーにおける継承という観点から、1920 年代のユーラシア主義から、L. グミリョフや A. ドッギンに代表される現代のユーラシア論までを一本の流れで理解する研究視座も存在する。例として、Laruelle, *Russian Eurasianism*.

たな概念を創出するのではなく、一度は忘却された亡命者の思想を掘り起こした理由は何だったのか。そして、様々な思想的遺産から、他ならぬユーラシア主義が選択された要因は何だったのか。そこに何らかの世界観の一致をみたからなのか、あるいは、現実的要請を受ける中で政治的利用価値が見出されたからだったのか。

これには、主に二つの方向からの検討が可能であろう。一つは、ユーラシア主義の思想そのものがどのような問題関心から読まれてきたか、という点。もう一つは、政治・外交的文脈における各種ユーラシア論の受容と利用、その政治的機能という点である。

1990年代の新しい時代状況の下で、ロシアはどのような道を選択すれば良いのか。そもそもロシアとは何なのか。再び問われるようになったこれらの疑問に対する答え、問題の解決策や具体的ヴィジョンを過去の歴史の中に求めたというのが、ノヴィコワとシゼムスカヤの説明である。両者は、ユーラシア主義者の著作を集めたアンソロジーに付して、これを次のように表現している。

「祖国の文化や伝統とのつながりを失った亡命者たちの…この忘れられた思想は、今日の我々の探求や現実認識にとっても似通っており、近いものである。それは、待ち望まれる[問題の]解決への答えとして、あるいは警告として理解されたのである。」⁽³³⁾

この説明には、ソ連邦崩壊後のロシアにおいて、ユーラシア主義の思想が受容された背景の一部が窺われる。しかし、これだけではまだ、数ある亡命者の思想の中から、ユーラシア主義が選択された理由が明らかではない。それでは、ユーラシア主義が提供した「ユーラシア」概念に、今日何らかの利用価値が見出されたのであろうか。

外交論議の中で展開されている複数のユーラシア論をみると⁽³⁴⁾、かつてのユーラシア主義が立脚していた問題意識はもはやほとんど見られない。欧米主導の国際秩序への異議申し立てとして、その「均質化」への対抗措置として「ユーラシアの多様性」が提唱される僅かな例が見られるのみである⁽³⁵⁾。今日のユーラシア論は、かつての地域に立脚した秩序構想ではなく、国家を中心とした発想とプラグマティズムに少なからず支えられているといえる。この意味で、今日の「ユーラシア」概念は、1920年代のユーラシア主義からは脱却し、あるいは質的変容を経て、その政治的機能が重視されつつ用いられているということもできよう。

ただし、ユーラシア主義から今日のユーラシア論への移行や変容、その背景については、実証されるべき課題がまだ多く残されている。この点に関しては紙幅の都合上、ここでは問題を提起するに留め、詳細は別稿に譲ることとしたい。

お わ り に

近年、近代国家体系を内部から改革する試みを遂行しつつあるのは、EU、つまりかつてユーラシア主義が批判した「ヨーロッパ」である。ヨーロッパは、1989年以降の状況変化を受けて、かつて1920年代に提唱された地域統合構想を見直し、これを援用しながら統合を進

⁽³³⁾ Новикова, Л.И. и И. Н. Сиземская, «Евразийский искус» Новикова, Л.И. и И.Н. Сиземская (ред), *Мир России-Евразия, Антология*, Москва, Высшая школа, 1995, стр. 5.

⁽³⁴⁾ 外交論議における「ユーラシア」概念の用いられ方については、拙稿「ブーチン政権下の『ユーラシア』概念」木村汎・袴田茂樹編著『アジアに接近するロシア—その実態と意味』北海道大学出版会, 2007年。

⁽³⁵⁾ 例えば、Кортунов, С., «Становление нового мирового порядка» *Международная жизнь*, №6, 2002.

めてきた。他方、アジアでは、「アジア太平洋」や「東アジア共同体」の名の下で多方面の地域協力が進められつつある。ヨーロッパとアジアそれぞれの組織原理の狭間で、そのいずれとの結び付きも不可欠とするロシアは、今後も一定の思想的対応を迫られるであろう。「ヨーロッパの国家としてのロシア」「ユーラシアの国家としてのロシア」という自己認識が今後、どのような変遷を辿るのか。それをロシアの固有の課題としてだけでなく、変容する国際関係との連動性を意識しながら、注目していく必要があるだろう。